

朝食会講話シリーズ
vol. 325

更生保護の歴史と課題



神戸保護観察所 所長

廣川 洋一



神戸保護観察所 所長

廣 川 洋 一 (ひろかわ よういち)氏

略 歴

昭和 28年 11月	東京都板橋区で生まれる。
昭和 54年 3月	横浜市立大学文理学部 卒業
昭和 54年 4月	東京保護観察所 採用
	多摩少年院法務教官 (2年間)のほか、熊本・長野・名古屋・横浜・東京・宇都宮保護観察所などで勤務
平成 17年 4月	東京保護観察所八王子支部長に就任
平成 19年 4月 ~	新潟保護観察所長に就任
平成 21年 1月 ~	さいたま保護観察所長に就任
平成 23年 4月	神戸保護観察所長に就任
	現在に至る

はじめに

おはようございます。神戸保護観察所から参りました廣川と申します。

これからお話しをさせていただきますので、どうかお付き合いの程をいただきたいと思います。

尼崎倶楽部の第325回の朝食会にお招きいただき誠にありがとうございます。

更生保護についてお話しをさせていただく訳でございますけれども、皆さま初めてお聞きになることがあるかもしれませんし、また、更生保護というのは刑務所から出てきた人ですとか、そういう悪い人ばかりでございまして、朝からチョッとどうかと思われるかもしれませんが、どうぞお付き合いをお願いします。

お手元にレジュメと、もうひとつ「更生保護の歴史と課題」というペーパーがございまして、表面は文章で、裏面に歌詞が出ております。これは『犂せの黄色いボン』という歌なんですけれども、後ほどこの曲をおかけしまして、お話しをさせていただきたいと考えております。『犂せの黄色いボン』を、皆さま覚えていらっしゃいますか。

もう記憶ないかもしれませんので、チョッと最初だけ聞いてみたいと思います。

楽曲 『犂せの黄色いボン』（歌詞と翻訳は11ページを参照してください）

こういう曲なんですけれども、1973年に、大ヒットしました。この曲は私どもの更生保護と大変関係のある曲でございます。そこに至るまで、これから更生保護のお話しをさせていただきたいと思います。

「更生保護」について

最初にお話させていただきたいことは、更生保護とは何かという事でございます。こちらのレジュメにございますように、犯罪を犯した人、あるいは非行のある少年たち、そういう人たちを実社会の中で立ち直らせる、こういう活動が更生保護になります。

現在、更生保護は保護観察所、これは法務省の出先機関で、私もその職員ですが、法務省が務めております保護観察所の仕事となります。それから全国に5万人いる保護司は、民間ボランティアです。さらに、更生保護施設、或いは協力雇用主の皆さま、そして若者たちのボランティア活動であるBBS会ですとか、更生保護女性会、そういった人たちが一緒になって更生保護に取り組んでいます。

裁判員裁判制度が二年前から実際にはじまって、裁判を受けた後その人たちがどのようになるのか、刑務所に入って、その後出所して立ち直るにはどうするかが話題になってまして、更生保護に対しても非常に関心が高まり、私どもも、より一層国民の期待に応えなくてはならないと考えています。

更生保護の課題」

レジュメには書いておりません 課題」について、最初に申し上げたいと思います。

まず、私どもの更生保護の仕事は、再犯を少しでもなくすことでございます。世の中で犯罪が10件起きますと、その内の6件は再犯者による犯罪であると言われております。ですから再犯がなくなれば、世の中の犯罪の6割はなくなることになります。それから、犯人を捕まえてみますと、犯人10人の中に再犯者が何人いるかといいますが、3人で、人数としてはそんなに多くないんですけど、犯罪の件数では6割が再犯者によるもので、再犯を如何に減らすかということが大事な課題になります。

これは今日の課題だけでなく、これからお話しする明治時代、江戸時代もまったく同じであったわけですが、そこでどのような取り組みがなされてきたのかという事を、これからお話しします。

今、再犯をなくすという話をしました。犯罪にはいろいろありまして、たとえば覚醒剤とか大麻ですとか、そういう薬物事犯、そのような人たちのどうするのかということは国によっても違いまして、東南アジアや中東では持っているだけで死刑という国もあります。我が国ではそういうことはありませんが、そういう国もあり、あるいは、持っているだけで別に罰せられない、そういう国もあるわけです。そういう薬物犯罪をどうするか、あるいは、高齢者の犯罪が我が国では大変多くなりました。アメリカとかヨーロッパでは、犯罪をするのは元気な30代、40代といった体力も一番元気な人がし、高齢者は犯罪をしないと罰せられないような国もあるんですけど、我が国では65歳以上の高齢犯罪者が大変増えてきておりまして、最近10年で3倍になり、高齢犯罪者をどうするのか。それは福祉の課題ではないか、あるいは、障害者の犯罪をどう扱うかなど、いろいろな課題がございます。

心神喪失の方の扱いについては、レジュメの一番下にあります医療観察制度が、5年前から開始されております。これは池田小学校の事件を契機として、医療観察制度が開始されたのですが、このように犯罪を犯した人や少年をどのように処遇するか、すべてを含めて刑事政策と呼んでおりまして、その一翼を担うものとして更生保護制度も位置づけられ、保護観察所の職員、また全国の保護司さんたちと一緒に取組んでいます。

更生保護制度の歴史」

更生保護の制度が開始されたのは、昭和24年に「犯罪者予防更生法」という法律ができましたが、実はそれ以前から、戦前から似たような制度はありました。

戦後の制度から申し上げますと、昭和の24年7月から犯罪者予防更生法という非常に分かりにくい名前の法律なんですけど、犯罪者予防更生法という立ち直りを支援して対象者を保護するという更生保護制度が誕生しました。更生保護という言葉はこの時にはじめて世の中に出てきた言葉であります。

戦前には更生保護という言葉はございませんでした。戦後の制度をつくる時に、犯罪者の社会復帰を考えた時に、更生保護という言葉や制度がつくられたという事があります。

更生保護は昭和24年7月から開始されましたが、その時に東京・銀座の商店街で「銀座フェア」として

パレードなど、いろんな行事が行われました。

具体的には、犯罪者予防更生法が施行されて世の中が明るくなることを期待して、銀座の飲食業の組合ですとか、通りの連合会、それから露天組合、そういう人たちが集まりましてフェアをした。『街頭 200 扉』とか『街頭話の泉』とか、内容はよくわかりませんが、あるいは『ど自慢』とか『ミス銀座』とか、キャンペーンをしました。



これが元になりまして、翌年もこのキャンペーンをしようということで、『矯正保護キャンペーン』という非常にかたい名前のキャンペーンを法務省がいたしまして、これでは名前がかたすぎるということで、その翌年の昭和 26 年から『社会を明るくする運動』という名前に変わりました。今年で 61 回目でございます。

今年の『社会を明るくする運動』のポスターは、黄色い羽根のポスターで、やり直せる社会に賛成です』となっております。7 月になりますと、街のあちこちにこのポスターが掲示されると思います。

ここに使われております『黄色い羽根』は、後ほど『せせの黄色いボン』につながるというお話をさせていただきます。

今、戦後の昭和 24 年に新しい制度がスタートしたと申しました。その翌年の昭和 25 年、保護司の制度が出来ました。保護司さんも、戦前からの経緯で、最初は成人保護司と少年保護司とに分けていたんですけれど、全国で 52,500 人の保護司の皆さんが活動しておられます。

保護司制度のルーツはどうなっているかと申しますと、このレジュメの真ん中程にございますが、昭和 14 年に『司法保護事業法』という法律ができました。戦争の前でございますけれども、この時に委嘱された『司法保護委員』が全国に 14,000 人です。これが初めて国が認めた司法保護委員という制度でございます。

それ以前は民間篤志家、ボランティアの方が、まったくご自分の意思で、私財を投げ打って保護活動に従事していたということなんですけれども、昭和 14 年の 9 月に、司法保護委員の制度が出来て、それが昭和 24 年から保護司の制度になって今日につながっているということでございます。

司法保護委員の制度が出来た年に、東京・九段の軍人会館、今日で言いますと九段会館で、大会を開きました。この当時は日本の領土も広がったものですから、カラフトとか朝鮮とか、そういう所からもこの司法保護委員の人たちがいっぱい集まって大会をしたと言われております。

昭和 14年に司法保護事業法が出来るまではどうだったのかと申しますと、それ以前は出獄人保護、あるいは免囚保護が行われておりまして、それがここに書いてございます。原胤昭という人が「東京出獄人保護原寄宿舎」を造ったのが明治 30年です。

その前の明治 2年に金原明善と川村矯一郎により「静岡県出獄人保護会社設立」がございまして、これが免囚保護で、更生保護の元々のスタートと言われております。

川村矯一郎の「矯」という字は「矯正教育」の「矯」という字ですが、金原明善と川村矯一郎は、更生保護の歴史で有名なお二人になります。

金原明善は、静岡県の事業家で、川村矯一郎は、福沢諭吉と同じ大分県中津藩の下級の士族です。川村矯一郎は 2回監獄に入った後出所、確か保釈されまして、大阪で木戸孝允という歴史上の人物を大阪で暗殺しようとしたことが、相手の方が腕が強く負けてしまって刑務所に入った。静岡の刑務所に 2年間、当時は静岡県監獄署ですが、2年間入って明治 13年に出所しました。その時に金原明善に出会いました。金原明善は静岡県で治水事業を手広くやっていて、天竜川の治水事業などをやっていた人ですが、川村矯一郎はこの人の指導に従って一生懸命がんばったことで金原明善に認められて推薦され、静岡県の監獄の副所長になりました。

元受刑者が刑務所の副所長になり、川村矯一郎は受刑者を指導したんですけれども、その中に懲役 10年という粗暴な男の人がいて、その人を立ち直らせようとして一生懸命指導した。そして、その男は「どんな事があっても、もう悪いことはしません、頑張ります」と川村矯一郎に約束して出所しました。

ところが、その男が監獄から出所して家に帰ってみると、もう 10年の間不在ですから奥さんは既に別の男と結婚して、家族も親族も誰も相手にしてくれない。「どこか向こうに行ってくれ」と男を受け入れてくれなかった。

男は悔しくて、もう一度悪いことをしてやろうと思ったんですが、その時に川村矯一郎との約束を思い出して、再犯はとどまったが自殺してしまいました。

自殺する前に川村矯一郎宛ての遺書を書いた、自分はこういう事情で死にますという遺書を書いて送ったんですね。手紙を受け取った川村矯一郎は、金原明善のところに行って、「自分は監獄で一生懸命指導しているんだけど、出所した人が帰るところがなかったり仕事がなかったりすれば、立ち直ることは難しいんじゃないかと訴えたんです。

それで、話を聞いた金原明善が「それではいけない」と、静岡県出獄人保護会社を設立し、静岡県で、出所した人たちの相談に当たったり、仕事の世話などをはじめました。これが明治 2年です。これ以降、全国各地でこうした運動がはじまったということです。

その後明治 30年、原胤昭という人をご存知の方はいらっしゃるかと。この人は、ここに書いてございますように 13代目与力で、最後の与力と言われております。与力に生まれると世襲ですから、与力で一生過ごすことが出来る。この人は南町奉行所の与力で、13歳のときから、当時の牢屋や人足寄場の仕事をしていました。ところが、江戸幕府が崩壊して社会が変わり、原胤昭は最後の与力ですが、当時の

土族の皆さんは、生きる希望といますか、将来が見えなくなるとどうしたかという、キリスト教に入った方がかなりいました。原胤昭さんもキリスト教に入らして、聖書の販売などをして儲けたということでありました。

ところが福島事件というのがありまして、その肖像を販売したということで、明治 16年に刑務所に入れられてしまいます。かつて自分が監獄で指導する立場にいましたが、今度はその人が三ヶ月ですが、同じ石川島の監獄に入れられてしまったという話です。

有名なお話ですが、原胤昭が獄中で病気になりまして、コレラかチフスかにかかりまして死にそうになった。もう死んだと思われて死体置き場に置かれているうちに復活したというエピソードがあります。そこまではなかったと本人は後日述べています。出所してからは兵庫県に来まして、刑務所といますか監獄で指導者になり、その後全国各地の監獄を移って、北海道の月形で教誨師をしていたんですが、当時、キリスト教と 仏教とで教誨師の対立がありまして、それが嫌で教誨師を辞めて東京に戻り、毎日新聞の事務長、それから女子教育をしようと学校もつくりました。原学校というキリスト教系の学校で、幾つか説はあるんですけども、現在の女子学院、名門の女子校につながっています。

明治 30年に皇太后御大葬恩赦があり、その時に原胤昭は仕事をやめ、「東京出獄人保護原寄宿舍」を設立しました。その後、原胤昭は長生きして、昭和 17年、89歳で亡くなるまで原寄宿舍で、出所した人の保護、あるいは女子の保護、あるいは虐待された子どもたちの保護を積極的にしまして、亡くなるまでに 15,000人を保護したと言われております。

ただ、あまり歴史に残っていないのは、この人は名誉欲がなく、全財産を寄付してしまったので、残っているものが何もないということで忘れられてしまいました。

原胤昭を主人公にして書かれた本があります。これはお遊びの話になりますが、山田風太郎が昭和 6年に読売新聞に「明治十手架」を連載しています。原胤昭が出てくるお話なんですけれども、悪い人たちと戦っていく時代小説で、キリスト教の十字架と 与力の十手の両刀使いで悪と戦うという、そういう面白い痛快な話なんですけれども、大隈重信、夏目漱石などが出てくる、そういうお話でございます。

こういう風に、明治時代にいろんな人が出てきて、出所者の保護、あるいは女性の保護、子どもの保護、児童福祉のようなことをしていた。まだ社会福祉という制度も考え方もなかった時代にこういう活動がはじまったんですけれども、その後、社会福祉や児童福祉が公になってきますと、出所者の更生保護を離れて福祉の方にいく人が多くなりまして、福祉と更生保護との隔たりが非常に大きい時代が続くことになりました。

最近になりまして知的障害者、あるいは高齢者については、福祉との連携が言われるようになってきま

した。

原胤昭さんは石川島の人足寄場廻りの与力でした。人足寄場の話をこれからします。石川島人足寄場は、警視庁石川島監獄署、その後巣鴨監獄となり、そして府中刑務所という全国一の刑務所につながっていきます。府中刑務所の見学に行きますと、この刑務所のルーツは石川島人足寄場ですという解説があります。更生保護の立場からも、人足寄場が更生保護につながっていることをこれからお話しします。

その前に吉田松陰と高野長英です。

吉田松陰は安政元年（1854年）に小伝馬町の牢屋に入れられて、4月から9月まで入ったということで、彼は詳しく記録に残しております。非常に参考になるんですけども、この当時は牢屋は裁判を受けるまでで、半年以内に裁判を終えるよう運営していたんです。吉田松陰は密航を企てて、それがうまくいかなくて、自首して捕まった訳なんですけれども、牢屋に入れられた。小伝馬町の牢屋は、入るときにお金を持っていないと駄目なんですね。「贖金」を持っていないと駄目だということで、それを知らずに牢屋に入って「贖金持って来たか」と言われて、「持っていない」といったら非常に雰囲気が悪いので、あわてて家族を呼んでお金を持ってこさせて、差し入れさせた。お金を持って来ないで入ると殺されてしまうこともあるのが牢屋で、中に牢名主がいて、それ以外の人たちは畳もないところでひしめき合っている。畳一畳のスペースに15人位が正座して座っていて、牢名主の言うことをきき、牢名主は次から次へと入ってくる新入りからお金を巻き上げて、仕送りしてきたそうです。

小伝馬町の牢屋は、定員が300人位でしたが、年間2,000人くらいが入ってきて、1,000人以上が死んでいる。裁判を受ける前に死んでしまった。病気になる人、栄養失調の人、殺されてしまう人、牢屋は過酷そのものです。そういうことが、吉田松陰の記録からも分かります。

吉田松陰の少し前に高野長英がいました。この人も皆さんご存知と思いますが、蘭学者で、本を書いただけで罰せられる時代で、自首したのですが、1839年、小伝馬町の牢屋に入れられた。この時は、今日で言えば無期懲役で、牢屋は本来は裁判を受けるまでの場所なんですけれども、自首したということで、死刑にならずに特別扱いで、永牢といって、一生小伝馬町の牢屋にいたることになったんです。



高野長英はなかなか図太くて、最初は新入りだったんですけども、その後牢名主になりまして、畳を20枚重ねた上に君臨して、新しく入ってくる人からお金を巻き上げて親に仕送りしていた。ただ、それで

も一生牢から出られない、これでは嫌だと、高野長英はお金を使って牢役人に放火させた。入牢5年目、1844年6月30日の新月の夜でした。火事が起きると当時は「切放し」といって牢屋を開けて出してくれたんですね。三日後までに帰ってくればいいという制度がありまして、彼はそれでそのまま脱獄して、全国を転々としました。兵庫、明石にも来ました。最後は江戸で南町奉行の急襲を受けて自殺しました。1850年享年47歳でした。

今日でもこの制度は残っています。刑務所の法律には「解放」と書いてあります。火事や地震など非常事態の時には刑務所は解放出来る。要するに逃がすんです。実際には、今はしていませんが、制度としてはあります。

牢屋に入った人の代表として、吉田松陰と高野長英のお話をさせていただきました。

「人足寄場から更生保護へ」

鬼平こと長谷川平蔵の石川島人足寄場にいきたいと思います。

1790年(寛政2年)となっておりますが、ちょうどヨーロッパではフランス革命が起きた頃でございます。老中の松平定信は「江戸の町には無宿人がたくさんいる、この人たちを何とかいなくちゃいけない」と考えました。実は、江戸時代になって街中に「無宿人」が出てきました。農村、あるいは町の中から出てきた人たちが無宿人となって増加し、仕事があればするんだけれども、物乞いをしたり犯罪をしたりと、治安上よろしくない。無宿人を何とかしようということで、いろんな対策があったんですが、建物を造って事業をはじめると、無宿人がそこから逃げたりしてうまくいかなかった。

どうしたらいいだろうと考えていたところ、この長谷川平蔵、火付け盗賊改めという警察と言いますが、その仕事をしていた人なんですけれども、アイデアを出したんです。隅田川の河口の佃島、石川島の海に施設を造って逃げられないようにして、そこで無宿人を指導して手に職をつけさせて社会復帰させたらいいと、そういうアイデアを出しましたところで、それがいいということで、松平定信が認めたのが石川島人足寄場です。

長谷川平蔵が造ったということで、これも小伝馬町の牢屋同様定員が300人規模だったんですけれども、非常に評価されておりまして、先ほどからお話していますように、石川島人足寄場は80年間、明治まで続き、その後の監獄・刑務所にずっとつながっているということです。世界に誇る制度と言われております。

ただ、長谷川平蔵本人はあんまり評判がよくなかったようです。パフォーマンスばかりだとまわりの人たちから言われて、その後出世しなかったということです。人足寄場を造るお金が足りないのも、その資金を相場につぎ込んで増やしたと、そういう話もあるなかなかの人なんですけれども、あんまり出世しなかったということです。

鬼平こと長谷川平蔵の石川島人足寄場では、無宿人、あるいは軽微な罪を犯した無宿人を収容して、手に職をつけさせて社会復帰させました。これは今日の刑務所と同じような考え方でございます。

何故それまではこんな発想がなかったのか考えてみたいと思います。

その前の時代になりますけれども、1742年、徳川吉宗の『公事方御定書』が出来ました。これは当時の公儀の法度をまとめたもので、要するに法律、刑罰が全国ばらばらで、身分によって刑罰が違ふ裁判の仕方も違ふ、そういうことでしたが、それをまとめたのが1742年の『公事方御定書』です。

この当時、江戸時代の刑罰制度を考えますと、公儀の法度という制度と、それから町とか村にはそれぞれ掟というものがあつた。五人組とかいろいろあつたけれども、この二つの刑罰制度が並列して行われていました。どちらも、刑罰の基本は、死罪、死刑にする、もうひとつは追放する、このふたつが基本です。

それに加えて、例えば鞭で叩くとか入れ墨を入れるとか、そういういろいろな付加刑があつたんですが、基本は死刑か、追放するかでした。死刑になった場合は、その後世の中にいないわけなんです、追放された人たちは何処かに行かなくちゃあならないということで、追い出された人たちがまた集まって、悪い集団をつくったり、生活が出来なくなつてまた悪いことをするという悪循環になってしまう。刑罰をきちんと執行すればするほど世の中が良くならない、治安が悪化するのです。

これじゃあいけないということで考えられた一つが、石川島の人足寄場だったのですが、これはごく軽微な犯罪をした人たちのためであり、それ以外の人たちは今までどおり死罪か、あるいは追放されるかということでした。

それから、入れ墨を入れる刑罰は、後で人が見れば前科者と分かるということですね。入れ墨を見れば「この人は罪を犯した人だな」と分かるということでありまして、その人が社会に戻った時に立ち直る、そのためにはどうしたらいいかということが、まったく考えられていなかった。

それがずっと続いてきましたが、これでは駄目だということで、明治時代、新しい制度にしようと、重すぎる刑罰はやめる、鞭打ちも入れ墨もやめましたが、死刑は続きました。明治時代は、全国各地に監獄を建築し、悪いことをした人はもちろんですが、思想的におかしな人、あるいは言動がおかしい人、そういう人たちはどんどん捕まえてしまうことをしました。

全国各地に監獄を建築し、明治のはじめくらいから造り始め、年間の収容者は20万人でした。今日、刑務所に入っている人は、6~7万人ですが、当時は総人口は半分で監獄には20万人以上いて、死刑もずっとあつたんですね。年間1,000人以上が死刑執行され、明治20年くらいまでそれが続いていました。

それはともかくとして、刑罰制度を変えようということで、監獄を造ったということです。監獄はそこに職員が見ていて本人を指導して、社会復帰させるのですが、社会に戻ってきた後の手立てがなかったの、民間篤志家、金原明善らが立ち上がって、その人たちの世話をはじめたんです。

それが、昭和14年になりまして司法保護委員制度になり、今日の保護司の制度になるという、こうい

時代の流れでございます。

明治になった時に、刑罰に対する人々の考え方、あるいは社会復帰に対する考え方が変わっていったということです。罪を犯した人たちを、また社会に戻していこうということです。追放するのではなく戻していこう、そういう考え方が生まれたのが、この明治になってからということです。

それで、昭和24年から新しい制度が始まり、銀座の商店街の皆さんが立ち上がったということで、その後、「矯正保護キャンペーン」が昭和25年に行われ、昭和26年から「社会を明るくする運動」となりまして、今年のポスターが、「やり直せる社会に賛成です」で、「犯罪や非行防止、立ち直りを支える地域のチカラ。」を、地域の皆さんに訴えて、非行少年をなくそう、あるいは更生に理解を示そうという運動が行われます。

今年のポスターの図柄は、黄色い羽根です。黄色い羽根はどういう意味をもっているのかと申しますと、昔、私が子どもの頃などには、交通安全で黄色い羽根をつけた記憶があるんですけども、全国的な運動ではなかったそうです。黄色い羽根は、平成20年長崎で始まったんですが、何故長崎の保護司会が黄色い羽根を始めたかというと、こちらの裏面に



なりますけれども、一番下のところですね、映画『掣せの黄色いハンカチ』が1977年に公開されました。

山田洋次監督作品で、これがその当時、第一回日本アカデミー賞をとりました。

映画の内容は、網走刑務所から出てきた男が妻の所に帰ろうとするんですが、その時にいろいろトラブルがあり、武田鉄矢とか桃井かおりが出てきて、それで家に帰ると黄色いハンカチが電信柱と言いますか、万国旗のように結ばれていたというお話であります。

映画の元になったのが、『掣せの黄色いリボン』という歌です。この歌は、刑務所から戻る人が、バスに乗って家に帰るんですけども、刑務所で奥さんに手紙を書いた。もし自分をまだ受け入れてくれるのなら、古い樫の木にリボンを巻いておいてくれと、黄色いリボンを巻いておいてくれと、それが見えれば自分は家に帰るけれども、見えなければもう家には戻らないと、そう手紙に書いたんです。心配で自分では外を見れないので、バスの運転手に頼んで見てもらったところ、100本もの黄色いリボンがあって乗客も喝采したと、そういう歌です。ちょっと聞いてみたいと思います。

左側が歌詞でございますので、もし英語でと思われる方は見ていただきたいと思います。

楽曲 『掣せの黄色いリボン』

家に帰ると歌っていますが、これが1973年に全米ナンバーワン、イギリスでもナンバーワンになり、それをもとにして映画『幸せの黄色いハンカチ』がつくられて、去年アメリカでも同じ映画がリメイクされて、やはり桃井かおりが出たそうです。いずれにしても、刑務所から出てきた人をきちんと受け入れる、奥さんが受け入れる、そういう歌でございます。これは更生保護にもつながることで、この黄色い羽根が、今年の運動で使われているということです。

ちょうど時間になりました。私からいろいろお話をさせていただきました。皆さまにはご静聴していただきまして、誠にありがとうございました。

皆さまの活躍、大変祈念しております。

ありがとうございました。

豊かな地域づくりのお手伝い。
＜あましん＞

地域の**文化・教育・環境**など、
元気な地域づくりに貢献します。

尼崎21世紀の森づくりを支援します。

※あましんは兵庫県と協定し「企業の苗木の里親第1号」としてスタートしました。



 **尼崎信用金庫**
AMASHIN
<http://www.amashin.co.jp>



ポップス 幸せの黄色いリボン』

トニー・オーランド&トーン

Tie a Yellow Ribbon Round the Ole Oak Tree
I'm coming home, I've done my time
Now I've got to know what is and isn't mine
If you received my letter telling you I'd soon be free
Then you'll know just what to do
If you still want me
If you still want me

(コーラス)

Whoa, tie a yellow ribbon round the ole oak tree
It's been three long years
Do you still want me? (still want me)
If I don't see a ribbon round the ole oak tree
I'll stay on the bus
Forget about us
Put the blame on me
If I don't see a yellow ribbon round the ole oak tree
Bus driver, please look for me
'cause I couldn't bear to see what I might see
I'm really still in prison
And my love, she holds the key
A simple yellow ribbon's what I need to set me free
I wrote and told her please

(コーラス 繰り返し)

Now the whole damned bus is cheerin'
And I can't believe I see
A hundred yellow ribbons round the ole oak tree
I'm coming home, mmm, mmm

黄色いリボンを古い樫の木に結んで
僕は家に帰る、僕の時間(刑期)を終えた
今、僕は僕のものかどうか知ることができる
君が、僕が自由になる、出所することを知らせる手紙を受
け取れば、君は何をすべきか知るだろう
もし君が僕をまだ必要とするのなら
もし君が僕をまだ必要とするのなら

(コーラス)

古い樫の木に1本黄色いリボンを結んでくれ
長い3年間であったけれど
君はまだ僕が必要かい(まだ必要かい?)
もし黄色いリボンが見えなかったら
僕はバスに残り(下車しない)
僕たちのことを忘れるよ
僕が責められるべきだ(僕が悪いんだ)から
もし黄色いリボンがみえなければ
バスの運転手さん、僕の代わりに見てくれ
僕にはとても見る事ができないから
実際に僕はまだ刑務所にいるんだ
そして、愛する彼女が鍵を握っている
ただ1本の黄色いリボンが僕を自由にする
手紙に書いて彼女に頼んだ

(コーラス)

今、僕を罰していたバスの乗客が喝采している
そして、僕は目の前が信じられない
古い樫の木に結ばれた100本もの黄色いリボン
僕は、家に帰るんだ

1973年ビルボード年間ランキング1位

映画『幸福(しあわせ)の黄色いハンカチ』1977年公開 山田洋次監督作品

出演 / 島勇作・高倉健 島光枝・倍賞智恵子 花田欽也・武田鉄矢

渡辺係長(警官) 渥美清 小川朱美 桃井かおり 帯広のやくざ たこ八郎

受賞 / 第1回日本アカデミー賞 第51回キネマ旬報賞

第32回毎日映画コンクール日本映画大賞 第20回ブルーリボン賞など